異種混成的な世界における知のポリティクスを考える

H. コリンズの専門知論と B. ラトゥールのアクターネットワーク理論の比較検討を通して

論文概要書

栗原　亘

異種混成的な世界における知のポリティクスを考える
H. コリンズの専門知論と B. ラトゥールのアクターネットワーク理論の比較検討を通して
論文概要書

栗原　亘

１．本稿の目的と意義

われわれの生きる「社会」は、複数の人間が織りなす諸関係から成り立っている。だが、われわれの生きる「社会」は、人間と人間以外の（高度な科学技術から日用品までをも含む各種の人工物から、「自然」に属するとされる動植物にいたる）様々な要素との関係、すなわち人間と非人間との関係なしには成り立たない。では、人間と非人間の関係とはどのような関係なのだろうか。

本論文の目的は、人間と非人間との関係をどのように把握・記述すべきなのか、そして人間と非人間との関係をどのように構想していくべきなのかを、知のポリティクスという観点から、すなわち、知をどのように把握し、どのように編成していくべきなのか、という観点から考察することにある。そうするにあたり、本稿では、科学およびテクノロジーと「社会」との関係を探究するサイエンス・スタディーズを主たる活動の場としてきた 2 人の論者の議論を取り上げる。H. コリンズと B. ラトゥールである。彼らはそれぞれ、人間－非人間関係と知の問題に関して対照的な立場に立ちながら、ともにサイエンス・スタディーズという分野で議論を展開してきた。しかも彼らは、互いに相手を典型的な論敵として認識してもいる。

コリンズの仕事は、重力波に関する研究者コミュニティの経験的な参与観察から、人工知能に関する理論的な議論に至るまで、多岐にわたっている。ただし、それらには通底する特徴がある。あくまでも人間中心的な観点に依拠するという点である。彼は人間たちから成る「社会」を想定し、それが人間以外の存在――人工物から動植物に至る諸々――と向き合っているというモデルを堅持している。

そのうえで彼は、特に専門知を重要視し、適切な専門知を有するものこそが高度に専門的な問題に対して役割を果たしうるという「常識的な立場」を堅持し続けている。本稿では、彼が掲げる「サイエンス・スタディーズの第三の波」なる研究プロジェクトを特に集中的に取り上げるが、それは、この研究プロジェクトがまさにコリンズの「常識的な立場」を理論的に下支えするためのものであったと考えるからである。

コリンズは、非人間をあくまで人間によって解釈されたり利用されたりする対象として捉えたうえで、それを適切に解釈・利用できるものこそが人間と非人間の関係構築に積極的に参与すべきであると考える立場に立っている。コリンズはこうした主張を展開する際、あくまでも既存の専門知の体系を尊重することを強調し、いわば保守的な性格の知のポリティクスを構想しているのである。

これに対しラトゥールは、脱・人間中心的アプローチと形容されるアクターネットワーク理論（ANT）の提唱者の 1 人である。脱・人間中心的アプローチは、われわれの「社会」について考えるにあたり、人間だけではなく非人間の能動的な役割をも強調する。ラトゥールは、そうした ANT の観点から、われわれが生きる「社会」を捉えるうえで非人間の果たす役割を十全に主題化する必要性を訴える。彼は、われわれが生きる「社会」はそもそも人間中心的に構築されているわけではないと考え、たとえば「社会」と「自然」といった二分法も否定されるべきであると主張する。そして、知の在り方をこのような認識に見合う形に変化させる必要性を主張している。そう主張するにあたり彼は、いわゆる専門家に限らず、通常は素人とみなされる人々をも、知の形成へと積極的に参与させることが必要であるという立場に立っている。それだけでなく、彼は、人間だけではなく非人間をも知の形成へと参与させる方途を探ろうとしている。以上から、ラトゥールは、保守的なコリンズの議論に対し、既存の知の体系の不備を指摘し、それを変容させることを重視する、いわば変革志向的な知のポリティクスを構想していると言える。

本稿の立場は、どちらかと言えばラトゥールの脱・人間中心的アプローチに近い。人間の世界は、そもそも脱・人間中心的に構成されている。このことを無視して人間中心的な立場を採ることは、人間と非人間との関係が多様化し複雑化し続けている今日、ますます困難になってきている。これが本稿の見解である。しかし、だからと言って、もっぱら人間に焦点を合わせた研究が生み出してきた知見、そして生み出し続けている知見もまた、捨て去られるべきだとは考えていない。それらの知見は、ある意味ではむしろ、これまで以上に深く展開される必要があると考えている。

本稿は、2 人の議論のそれぞれの特性を、知のポリティクスという観点から掘り下げて検討し、両者の立場がそれぞれどのような長所と短所を有しているかを明確にしたうえで、それらはいかなる協力関係に置くことができるのかを提示することを目指す。別様に言えば、本稿は、コリンズとラトゥールというそれぞれ極端な立場に立つ 2 人の論者の議論を軸に据えつつ、人間中心的なアプローチと脱・人間中心的アプローチ、そして保守的な知のポリティクスとより変革志向的な知のポリティクスとの間に、表面的な対立関係を超えた理論的な協力関係を築くことを試み、今後の「社会」において必要とされるであろう知のポリティクスの構想に貢献することを目指す。

わたしたちの生きる「社会」は、今後、科学・科学技術的な活動などを介して、多種多様な非人間をますます積極的に組み込みながら形成されていくことになるだろう。また、気候変動のような主題のもと、動植物や、さらには地球（ガイア）そのものとすら向き合わなければならない状況に置かれることになるだろう。このことを踏まえれば、人間と非人間とから成る異種混成的な世界における知のポリティクスを正面から考察しようとする試みは、今後、理論的にも実践的にもますます必要になってくるだろう。

２．本論の構成

本稿は、以下の８つの章から成る。

序章
第１章　サイエンス・スタディーズの「第三の波」と専門知の社会学
第２章　専門知を記述する：コリンズの SEE の射程
第３章　「第三の波」における知のポリティクス
第４章　コリンズの知のポリティクスの可能性と限界
第５章　ラトゥールにおける近代論と ANT
第６章　政治的エコロジーと知のポリティクス：ラトゥールにおける ANT と政治
第７章　知の地形図の記述に向けて：これからの知のポリティクスを構想するために

３．各章の概要

本稿での議論は、序章で問題意識とアプローチ方法を明示したあと、第１章から第４章ではコリンズの議論について、第５章と第６章ではラトゥールの議論について、それぞれ詳細に検討したうえで、第７章において、それらを比較しながら両者を連携させる方途を示す、という手順で進めていく。

第１章では、まずサイエンス・スタディーズの略史を示し、コリンズとラトゥールがそのなかでどのような関係にあるのかを確認したうえで、コリンズの議論の内容に関する検討へと移行する。その際とくに、コリンズが同僚たちと 2000 年代に入ってから提起した「サイエンス・スタディーズの第三の波」なる研究プロジェクトに着目する。コリンズとその同僚たちは、このプロジェクトにおいて専門知の理論を構築しようとしている。彼らのこの試みは、サイエンス・スタディーズという分野に対してだけでなく、社会理論全体に対してもまた寄与するものと考えることができる。というのも、社会学においては、知の社会学や知識社会論を標榜してはいても、実際には、社会的ステータスの体系や職業体系の観点、つまり属性の観点からみた専門職が分析の中心的な対象とされる傾向が長く続いていたからである。これに対してコリンズたちは、とくに現象学や認知科学的な議論における身体論的アプローチを踏まえながら、さらに知の集合的次元を議論の俎上にあげることによって、まさに知の社会学的な観点から専門知について論じているのである。

第２章では、コリンズによる専門知論に関して詳細に確認し、その意義と問題点を精査する。コリンズは M. ポランニーが提起した「暗黙知」概念を批判的に継承し、独自の専門知論を展開している。そのなかでコリンズは、人が知を獲得する仕方に着目し、専門知を真正な意味で獲得するとはどのようなことを意味するのかについて、理論的に整理・検討している。コリンズは、とくに現象学的な伝統を汲む H. ドレイファスの議論などを引き合いに出し、その重要性を踏まえつつも、その身体偏重的なアプローチを批判する。コリンズは、専

門知という主題を扱ううえで、身体以上に問われなければならないのは「言語」であると主張するのである。言語は身体的な実践を束ね、知の集合的次元を生み出す役割を果たす。そのため、言語を射程にいれてはじめて専門知というまさに知の集合的次元にかかわる主題は適切に理論化しうる。これがコリンズの主張である。

コリンズの議論は、専門知の理論を構想していくうえで欠かすことのできない重要性を有していると言える。しかし、コリンズは、言語に着目し、知の集合的次元を取り上げる一方で、この知の集合的次元そのものが、そもそもどのように形成されるのか、という点に関しては、十分に問うていない。コリンズは、さまざまな知の領域が存在する、というところまでは論じているが、そもそも個々の知の領域がいかにして形成されてきたのかまでは問うていないである。

以上のようにコリンズの専門知論の要点を整理したうえで、本稿は、コリンズの専門知論が十分に問うことのできていない「知の集合的な次元はいかにして形成されるのか」という論点は、言語か身体のいずれか一方のみを取り上げたり強調したりするのではなく、言語と身体とが形成するフィードバックループに目を向けることではじめて問うことができると指摘する。

第３章では、コリンズとその同僚たちが専門知の理論に基づいて提起する「選択的近代主義」という立場に目を向ける。コリンズたちは、ラトゥールが「近代」を否定するのに対して、あえて「近代」という在り方を「選択的に」尊重する議論を展開している。そうした彼らの立場について議論する際にとくに注目すべきは、ラトゥールが、諸領域、とくに「政治」と「科学」を分離・分断しようとする傾向（それは、学術的なレベルから日常的なレベルにいたるところに見られる）を批判するのに対して、彼らはあくまでも「政治」と「科学」を意識的に分離・分断をしていくべきだと主張している点である。本稿では、こうした選択的近代主義に関するコリンズたちの議論を、知のポリティクスという観点から整理し、その特徴について論じる。コリンズたちの知のポリティクスは、既存の知の社会的配分を把握したうえで、その知の社会的配分の現状をあくまでも前提としたうえでなされる実に保守的な性格を有していることが明示される。

以上の検討を通して、本稿は、コリンズの議論が有する意義とともに、その弱みも明示する。コリンズの専門知の理論は、知そのものを意識的に主題化しようとした点において大きな意義をもっているが、その理論の内容自体は不十分なものである。たとえば、知の集合的次元を主題化しつつ、それがそもそもいかにして生み出されるものなのかを十分には論じていないため、その観点はかなり硬直的なものとなっている。このことは、彼らが構想する知のポリティクスが、過度に保守的な性格のものとなっている主要因の 1 つともなっている。また、こうしたコリンズたちの議論の硬直的・保守的性格については、コリンズたちが、人間と非人間との関係を人間中心的に捉えすぎていることとも深く関係している。というのも、知の集合的な次元が生み出されるという側面を問うためには、人間が一方的に非人間に対して働きかけていく側面だけではなく、人間の方が非人間との関係のなかで変化を被っていくプロセスにも目を向けなければならないと思えるからである。こうした点を第４

章において小括したうえで、コリンズとは敵対関係にあるとみなされるラトゥールの議論を検討する。

まず第5章において、ラトゥールの思索におけるANTと彼の「近代」に関する議論との関係について確認する。ANTは、①人間だけではなく、非人間もまた一人前のアクターであり、エージェンシー（行為者性）を有しているとみなし、また、②人間中心的観点、すなわち、非人間は人間からの働きかけに対して受動的な位置しか占めないと考えるようなタイプの議論と非人間主義的観点――いわゆる技術決定論ないし環境決定論など――の双方を回避し、そして、③人文社会科学の知見と、自然科学の知見とを単に折衷するような方法もとらない。こうした観点を有するANTは、「脱・人間中心的アプローチ」と形容される立場を代表するものとして位置づけられ、数多くの論者によって頻繁に言及されてきた。

しかし、その言及のされ方や評価の内容は芳しいものばかりではなかった。もともと脱・人間中心的アプローチに好意的ではない論者からのみならず、脱・人間中心的なアプローチを試みている論者たちからさえも、批判ないし不満を投げかけられてきたのである。しかし、本稿では、そうした批判や不満の多くは、ANTを、そのまま応用して利用できる理論体系やすでに完成された方法論としてみなすという誤りを犯していることを指摘する。少なくともラトゥールにとってANTは、彼が「近代」と呼ぶものを乗り越えることを目指したある種の政治性をもつ運動体として把握されるべきものである。ラトゥールにとってANTは、無私の中立的な立脚点から正確で客観的な研究を遂行することを目指したものであるというよりも、ある種の政治的な実践としての側面をもったものなのである。そして、この点を踏まえると、投げかけられている批判や不満の多くが、実際には的外れなものであることが明らかとなる。この点を示すために、本稿では、まずラトゥールの「近代」論について詳述し、そのうえで、ANTの異種混成的ネットワークという観点が「近代」論に対してどのような関係にあるのかを明示する。

以上を踏まえた上で、続く第6章において、「ANTがある種の政治的な実践である」と言う際の「政治性」とはそもそも何を意味するのかについて、ラトゥールが使用するさまざまな主要概念を詳細に検討しながらみていく。そうするにあたっては、コリンズの議論との関係についても明示していく。ANT論者のなかでもとりわけラトゥールは、「科学」もまた別の手段による「政治」であるという主張をおこなったことで知られている。この主張は、いっけん、コリンズらの、「科学」と「政治」とは積極的に切り分けられなければならないという主張と真っ向から対立するようにもみえる。しかし、実際には、少なくともコリンズたちが想定しているような形では対立していない、というのが本稿の見解である。このことを明らかにするためには、ラトゥールが政治的エコロジーやコスモポリティクスという言葉によって何を指示しようとしているのかについて明確に把握する必要がある。また、ANT的な観点から実践される「フラットな記述」とは何かを正確に理解する必要がある。

最終章である第7章では、第1章から第6章までの議論を踏まえたうえで、コリンズとラトゥールの議論の相互関係を、知のポリティクスという観点からより詳細に比較検討する。そうすることで、彼らの議論がじつは、相互排他的な関係にあるというよりも、むしろ、適切な知のポリティクスを構想するうえでは同時に必要であることを示す。

コリンズたちは、知の社会的配分の現状を把握し、その配分状況に従った知の運営を目指すべきだと主張する。彼らは、あくまでも既存の知の領域の「自治」を重んじ、何らかの「問題」が生じた際には、その「問題」に関して関連性があると思われる専門知を保有する人間たちを特定し、そうした人間たちを適切に動員しようとする。そのために、彼らは、たとえば専門知に関する専門知を有するものたちから成るアドヴァイザー制度などを用意しておくことなどを提起する。以上のような、保守的とも言えるコリンズたちの知のポリティクスの発想は、突発的なアクシデントなどが生じ、可能な限り迅速な対応が求められる状況に対処するために必要となる基準の 1 つを提示している。

他方、ラトゥールの提起する知のポリティクスには、基本的に、そのまま応用することで、何らかの具体的な成果をすぐに得られるような即効性を期待することはできない。ラトゥールは、そもそも「即効性」を求めようとする発想に対して批判的である。彼は、性急な仕方で進んでいこうとする「近代」的な知の産出の仕方を問題視し、「スローダウン」する必要性を強調する。ラトゥールの知のポリティクスにおいては、人間だけではなく、人間と非人間とが織りなす異種混成的なネットワークの存在を認識し、知の在り方を徐々に変化させることで、一から世界を組み直すという気の長い作業を展開することが目指される。

つまり、コリンズたちは知の現状を把握し、それを活かすことを目指し、ラトゥールは、知の現状に働きかけ、それを変えようとしているのである。これらは相互に対立するというよりも、実際には相補的な関係にあり、同時に追求されるべきであることを明らかにする。

そして、最後に、コリンズとラトゥールの議論を積極的に連携させることによってはじめて可能となる記述の在り方——本稿はそれを「知の地形図」の作成と呼ぶ——を提示する。この「知の地形図」の作成という作業は、ラトゥールが提起する ANT 的な観点にもとづくフラットな記述に、さらにコリンズが探究した専門知の位相を加えることではじめて可能になる。本稿は最後に、この「知の地形図」の作成を、特にラトゥールが「近代的オブジェクト」と呼んだモノを把握し、それに対処するために必要となる知のポリティクスを構想するために必要不可欠な作業として提示する。そして、そのうえで、この「知の地形図」を作成するというプロジェクトによって、今後取り組んでいくべき具体的な課題を明示する。

以上